影の屋敷

月峰夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
影の屋敷

【Ｎコード】
Ｎ９４８６Ｍ

【作者名】
月峰夕

【あらすじ】
この物語の主人公、中学1年生の和泉原　奏音　（いずみはらかなと）。
彼は『影の屋敷』と呼ばれる、謎めいた屋敷で暮らす。人としてなら、ただ一人の住人。
人として…でなくば、彼もある意味＜人外＞なのだから。

プロローグ

とある住宅街の一角に、近所の人々に『影の屋敷』と呼ばれるお屋敷がある。
そこにただ一人、すむのは中学生の少年、和泉原　奏音　（いずみはら　かなと）。
しかし、そこにすむのは彼だけではない。
人間、という意味でならおそらく彼一人、となるだろう。
しかし、《人外》という意味でなら、彼を含めて四人、その屋敷には住んでいる。

そんな奏音には、それら人外の存在とすむだけの理由になりうる、特別な理由と血を、その身に持ち合わせている。
そのせいで、しばし騒ぎに巻き込まれることになり…

メインキャラクター設定（前書き）

これを読んでどういうキャラたちなのか、ちょっとでもつかんでいただければと思います。

メインキャラクター設定

和泉原　奏音　（いずみはら　かなと）
性別：男
年齢：１３
趣味：フルート演奏
　天体観測
性格：大人しく冷静沈着。時々子供っぽい事をするが、すぐにそれを後悔する
容貌：短く切られたこげ茶の髪に、鳶色の瞳　力使用時：紅の瞳
　日に焼けた事などないと思われるほどの白い肌

南風中学校１年生。
とある住宅街の一角にある、『影の屋敷』と言われる巨大屋敷に住む、住宅街では噂の多い謎の少年。

実は数年前に色々と呪われたように一族が死んでいった、和泉原家で唯一生き残った存在で和泉原財閥の全てを受け継いでいる。
本人は必要最低限あればいい、と屋敷と生活費や必要なものを買う以外、全く財産に手をつけていない。

母親が《人外》…神妖王、《神と妖の力》を持った王のただ一人の血族。
それにより、奏音はその血を引いた神と人間のハーフ、フォレンスであり、今のところ持った力は氷使い『アスノウン』。
なので、夜…特に月の夜には、『力』が暴走し勝手に荒ぶる神となる。大抵は封印の施された家の中にいるので、被害はない。力は、夜以外ならば自由使用。

趣味のフルート演奏はかなりの腕。時々敵の脳を操作し、被害を防ぐ洗脳が得意。とりあえず巻き込まれた人の記憶操作はもっぱら奏音の役目。

見た目こそガラスのフルートでありながら、実際はオリハルコンという、時々奏音に剣を防ぐ盾代わりに使われる、硬度最強のフルートを所持している。

フルートの名前は、『Ｍｏｏｎ　ａ　Ｔｕｎｉｎｇ　Ｆｏｒｋ』…ムーンチューニングと言う名。これを作ったのは奏音の曽祖父である、和泉原（いずみはら）和也（かずや）。

氷凪　水菟　（ひょうぎ　みなと）
性別：女
年齢：外見→１４歳前後　実年齢→３５００
趣味：チェス
　　氷の彫像作り
性格：冷淡で奏音達以外には冷たい
容貌：一番下でゆるく纏めている、長い銀髪の髪とつりがちな蒼の瞳

南風中学校２年生。
『影の屋敷』に住む美少女。
見た目こそか弱い少女だが、雪女や雪男と言った類の、冷華族の長で、持った力は氷使い『アスノウン』。

奏音と外見年齢が近いので、護衛をかねて中学校に通っている。優等生で他人にあまり干渉しないことから、学校では『氷のプリンセス』と呼ばれる。
誰に対してもそういう態度だが、乃炎と芳養は、多少緩和した態度、

奏音はもはや過保護の域である。

趣味のチェスは、自分で作った氷のチェスを使って行う。溶けないように特別な術をかけている。
乃炎が相手だと溶かされるので、そのときは普通のチェス駒を使って行う。

焔　乃炎　（ほむら　のえん）
性別：男性
年齢：外見→１９歳前後　実年齢→２０００
趣味：古本収集
　　アクセサリー&雑貨創作
性格：温和で温厚。人懐っこい。
容貌：肩に尽く程度の真っ直ぐで癖のない黒髪と、切れ長の暗い橙色の瞳

『影の屋敷』に住む青年。
礼儀正しい好青年で、サラマンダーやワイバーンと言った類の、龍焔族の一人で、持った力は焔使い『フレイスイアー』。

奏音の父親、和泉原鈴谷（いずみはら　すずや）が用意立ててくれた店で、古本屋兼雑貨屋を営み、古本屋のほうはマニアックな方々に受け、雑貨の方は本人の見た目とセンスの良さで女性受けがたいそういい模様。
誰に対しても敬語で、節介焼きで損をするものの、結果としては損以上のものをえている幸運な人。ひとえに、彼の祖父『白き龍』のお陰とは本人の談。その為か、奏音もそれに時々恵まれている模様。
トレードマークは首に巻いた赤の薄手マフラー。

草薙　芳養　（くさなぎ　はや）

年齢：外見→４０歳前後　実年齢→３０００
趣味：新作スイーツ作り
　チェス
性格：さっぱりとし飄々としている、気配りが事細か
容貌：顔の横の髪だけ白の整った薄い茶髪と、穏やかな灰色の瞳
　言うなら見た目はいわゆるちょい悪親父系

『影の屋敷』に住む初老の男性。
表向きは奏音の後見人で、狼男や精霊と言った類の、狼妖族の一人で、持った力は自然使い『リフネクト』。

『影の屋敷』の家事の一切合財を全て引き受け、乃炎の古本屋&雑貨店の隣の店で同じく鈴谷が用意立ててくれた、カフェ『ルクシューエ』を営み、近所では結構な評判。
誰に対しても物腰穏やかで、奏音に対しては執事のような状態。奏音本人は『どっかの偉い人になったみたい』だそうであまり好きではないらしい。
トレードマークは左目に付けた片メガネ。

水城　夕威　（みずき　ゆうい）
性別：男
年齢：１２
趣味：読書
　パソコン
性格：元気、明るい、天真爛漫
容貌：短めの跳ねた黒髪に、丸っこい漆黒の瞳

南風小学校六年生。
少し前に『影の屋敷』近くの家に引っ越してきた少年。
友人に悪い噂を聞いた後、外道魔獣『ガイジックビースト』に襲わ

れ、そこを奏音に助けられた。
その後このことを忘れるように、と笛の音を聞くが、洗脳や催眠術など、身体に悪影響を及ぼすものを一切受け付けない珍しい体質『キルケード』ということが発覚した。
それからちょくちょく、『影の屋敷』に遊びに行くようになった。

夕暮れ（前書き）

…メインが一人、増えるかも……

夕暮れ

「お前、『影の屋敷』って知ってるか？」
子供、というよりここら一体にある住宅街に住まう人々は皆知っている、『影の屋敷』と言う言葉。

「え？　何それ？　ていうか、知るわけないじゃん。転校してきたばっかだぜ？」
南風小学校に転校してきたばかりの、跳ねた短い黒髪に、同じ色の瞳を持った少年……水城　夕威（みずき　ゆうい）は、思わず知り合ったばかりの同級生に言い返した。

同級生……首筋を包むような染めたような茶髪に、これまたカラーコンタクトでも入れてるのかと疑いたくなるほどの水色の瞳をした少年、永野　和（ながの　かず）に訊ねかえした。
「それもそうだったな。わりぃわりぃ。影の屋敷、ってのはあそこに見えるでっかい屋敷だよ」

ほら、と和に示された帰り道の傍らに、確かに巨大なお屋敷があった。
日当たりは良好で、庭も手入れされていて、家の外壁も汚れ一つなく、さび一つない真っ黒の柵もとても趣味が良く、おとぎ話に出てもおかしくないほどに素敵な屋敷。

だと言うのに、何故『影の屋敷』と呼ばれているのだろう。
影と呼ばれるものは、一切ないだろうに。
「あそこに住んでるのは一人。それもじいちゃんとかじゃなくて、男の子一人なんだってさ」
「男の子？」

これまた趣味の良い飾りの施された、門の前で立ち止まりながら、和の言葉に、夕威は目をぱちくりさせた。
見上げた先にあるのは、大きなお屋敷。
あんなに大きな屋敷に、一人住んでいるのが？

「つっても俺らより年上なんだけどさ。中学生。去年俺たちの先輩…小学六年生で、今年中学一年生」
「あんなに大きい屋敷に？」

自分より一つ上なのに？
そう問いかけるような夕威の瞳に、気づいた和はうんうん、と頷く。

「そ。それにさ、あそこの屋敷に昔住んでたの、その男の子に加えてその父ちゃんと母ちゃんだったらしいんだけど、事故が相次いで親が亡くなって、親戚の家に引き取られたらしいんだ。でも、その親戚もすぐに死んじゃったみたいでさー」
「うわ…」

結構壮絶である。
「だから光みたいに綺麗だけど、影みたいに壮絶だろ？　だから『影の屋敷』ってワケ」
「へぇ～…」
「何か家に用事か？」

急に後ろから声を掛けられて、二人がビックリして振り返ると、南風中学校の制服を着た、少年。
こげ茶色の髪と、鳶色の瞳。一見すると弱々しく見えるが、目に宿る光だけが強く光っていた。

まず、と和が小さく呟き、夕威は言葉に詰まる。
「え、あ、あの……」
「用がないなら帰れ。邪魔だ」
かちゃん、と掛かっていた鍵を外して、少年は中に入ってゆく。かちゃん、と再び扉と鍵を閉めて、振り返らずに去ってゆく。がちゃり、と大きな屋敷の扉を開けて、中に消えていった。

「びっくりしたぁ～」
「あのひとが、その話の？」
和は胸を押さえ、夕威は問いかける。

「そ。　和泉原　奏音（いずみはら　かなと）つって、あの屋敷唯一の所有者。なにせ全員死んでるわけだし」
夕威と和よりかは背の高い少年を、思い出せばすぐに思い浮かぶのは冷たい瞳。他人に無関心、ともとれるほどに強い輝きを持つ瞳。

それよりも、と和は前置きして。
「帰ろうぜ、夕威」
「うん」
夕威は頷き、二人は家に向けて歩き出した。

――――この出会いは偶然か、はたまた必然か。知るのは、運命だけ。

始動（前書き）

……体育大会練習死にそうデス……

始動

「ただいま～」
夕威が家の扉を開けて帰宅すると、おかえり、と声変わりした少年の声がすると同時、顔を覗かせた。
「早かったな、夕威」
「朝兄こそ」
本名・水城朝陽、夕威の兄で中学一年生、身長も結構あって、弟の夕威から見ても格好良いという部類。
しかも、前の学校ではサッカー部所属のエース。
これだけ揃って人に嫌われないのは、朝陽の人に好かれやすい性格が、その理由だろう。

「どうだったんだ、学校？」
前は兄と兼用だった部屋だが、今は別々になった。自室に入りながら、朝陽が付いてきてそんな事を訊ねてくる。
「友達で来たよ。永野和くんてゆー、同じ住宅街の子」
「良かったな」
わしわし、と頭を撫でられて、夕威はくすぐったいよー、と抗議する。
「そういう朝兄は？」
「んー、サッカー部の奴らにすぐできるかな？　初日だしなんとも…」
ぽすん、と夕威はベッドに、朝陽は椅子に腰掛ける。
「あ、そういえばクラスに、なんだか妙な子がいたんだ」
「妙？」
夕威は目を瞬かせて、ぎし、と椅子を傾けて、朝陽は頷く。
「そ、話しかけてもなーんにも言わないし、昼食はさっさと屋上に

行ってるみたいで、名前を聞いたら答えてはくれたけど、それ以外は全然。帰りが偶然一緒になったからついていったら、途中で本屋に寄ったし……」
困ったように朝陽が呟き、うーんと唸って、その先を告げた。
「和泉原奏音、って本人は言ってたけど……」
「影の屋敷！！」

夕威が叫ぶように言えば、朝陽は知ってるのか、と問いかける。

「帰ってくる途中に大きいお屋敷、あったでしょ？」
「あぁ、アレがどうかしたのか？」
どうやら、こっち方面に帰るクラスメイトはいなかったようだ。あのね、と夕威は前置きして。
「アレが影の屋敷、って呼ばれてて……そこに和泉原奏音、って人が一人で住んでるって」
「へー……。あ、そうだ。母さんがおやつは冷蔵庫にプリンだってさ」
ふと思い出したように柔らかく笑いながら告げる朝陽に、夕威は両手を挙げて喜ぶ。
「プリン！？　やた！！」
プリンが大好きな夕威は早速、リビングに急いで、プリンを片手に席についた。
朝陽は新聞をソファーから取り上げて、お気に入りの籐製ロッキングチェアにすわり、読み始める。

「それで、朝兄はあの奏音って人、どう思ったの？」
「そういう夕威は？」
質問を質問で返されて夕威は戸惑ったが、口を開き、答える。

「浮世離れした気高さ？」

「俺らなんかと『格が違う』的な？」
新聞のページを捲りながら呟く朝陽に、違う違う、と夕威は手を振る。

「それとは何か違うんだよね……んと、なんていうか、場所が違う……？」
「気高い獅子？」
朝陽の言葉に、夕威の中で何かストン、と落ち着いた。
ぴん、としなやかに伸ばされた背筋に、簡単に近づけない威厳。
「誰にも頼んなくて、いる場所自体が違うみたいな？」
「そうそう、それ！！　って……うわっ！！」

思いっきり、だんっ、と机を叩くようにして夕威が立ち上がれば、反動で、机の淵にあったプリンが入れ物ごと、落下して、べしょっ、と落ちた。

それはもう、べしょっ、と。

「……」
「あちゃー……」
新聞越しにこちらを見る朝陽の表情は、ものすごく気の毒そうにしていて、夕威はというと思考停止に陥っていた。
「……」
自分の不注意とはいえ、プリンは夕威の大好物だ。
両手と両足を床に付き、打ちひしがれている夕威の背中を、しゃがんで朝陽がぽん、と軽く叩いた。
「……俺がお金出すから、食べてこい。色々と美味しいって、お勧めされたんだ。……とりあえずは頼むから、そんなに負のオーラを出さないでくれ……」
自分の弟ながらも、この辺りに撒き散らされる負のオーラに、朝陽

はおびえを覚えたものの、とりあえずはそれを告げた。

＜＞　＜＞　＜＞

朝陽に案内メモ渡され、向かった先は件の『影の屋敷』を少し過ぎて、通学路を少し逸れた場所。
そこには喫茶店と古書店が並んで建っていた。
とりあえず、カフェ『ルクシューエ』に入る。
「いらっしゃい」
カロン、と涼やかな音色を立てて開けられたドアの先にいたのは、顔の横の髪だけ白の整った薄い茶髪と、穏やかな灰色の瞳を持った、初老の男性だった。
店内は賑わっていて、いろいろな人がいた。それこそ夕威みたいな小学生から、お年寄りまで。
とりあえず、夕威はカウンター席に腰を下ろした。
「何にします？」
男性は訊ねながら、ことん、と氷の浮かぶコップを目の前に置く。
「あの、プリンが美味しい、って聞いてきたんですけど……」
「紅茶、卵、カスタード、抹茶、黒胡麻、どれがいい？」
男性の言葉に、しばし悩む素振りをして、夕威が選んだのは。
「えーと、カスタードで」
「了解」
ことん、と置かれたプリンは透明な器に入っており、柄が細いスプーンと一緒に出された。
「いただきます」
「召し上がれ」
嫌味さを感じさせないかっこいい笑みが向けられ、はむ、と夕威は一口目を口にした。
「またのお越しを」

カウンター越しに男性の声を聞きながら、先ほどまでの黄昏っぷりが消え、代わりに上機嫌な夕威は足取りも軽くカフェを後にした。
「〜♪」
プリンは、これでもかと絶品だったので、夕威のテンションはかなり良い感じだ。

辺りは鮮やかな紅に染まっており、とても美しいと思った。
『陰の屋敷』がもうすぐ、という曲がり角を曲がろうとした瞬間。
ズルルッ、と何か重いものを引きずる音がした。

夕威はぱちぱち、と目を瞬かせて、くるり、と後ろを振り返るが、何もない。
「気のせい、かなぁ……」
夕威が首を捻った瞬間、目の前に。

骨格標本で見るような骸骨の額に、サファイアのような石をはめ込んだ、スライムの身体をした生き物が、現れた。
「！？」
大きさは夕威よりも大きく、初めてみる意味の分からないものに、夕威の思考は停止する。

『生キノ良サソウナ、エサ……』
べろり、と骸骨の顔を自分の舌で舐めた怪物に、やや反応が遅れるが、餌って自分か！！、と内心で突っ込んだ夕威は、慌てて走り出す。
「うわっ！！」
しかし、ずるり、とした謎の液体を踏んでしまい、転倒する。
『ラッキーダナァ……コンナニ美味ソウナエサガ、最初ナンテ……』
色々と失礼な言い方である。しかし、喰われる、というのだけは間違いなさそうで、夕威はぎゅうっ、と目を閉じて、身体を強張らせ

た瞬間。

「はぁっ！！」

少年の声が聞こえて、恐る恐る夕威が目を開けると、漆黒の身体にぴったりとした衣装をまとった、少し年上くらいの少年が立っていた。

少年が怪物に蹴りを入れたようで、怪物の方を見ればビチャアッ、とドロドロした怪物が、地面に倒れていた。まぁ、吹っ飛ばされただけなので、倒れた、というには液状のこれには似つかわしくないような気がしたが。

「……」

興味なさそうに少年はこちらを一瞥し、たっ、と駆け出す。

ぐじゅぐじゅと実体を持たない怪物の身体に僅かにある、液体では無い場所を、たたんっ、と身体を軽く駆け上がり、跳躍すると空中でくるり、と一回転して身体を捻る。

そのまま、鞭のようにしなやかな足を、実体を持つその頭に蹴りこんだ。

『グアァッ！？』

ズサアァァッ、と勢いのままに怪物はなぎ倒されて、地に沈む。

少年はすぐさま足を折って、膝をそのまま地に倒れた怪物の鳩尾辺りに、思いっきり沈めた。

『フ、馬鹿メ……私ニソンナ攻撃ガ……』

「それは無いと思うぞ」

腐った顔を侮蔑に歪めていた怪物に、少年はあくまで冷静に、反論した。

液体で効果が無いかと思いきや、少年が降り立った場所から、徐々に凍り付いてゆく。

『ナンダト！？』

そのままぐっ、とつま先で高く跳躍して間合いをおき、ふっ、と身

体を地に僅かに沈めて、一瞬で間合いをつめる。
「はぁっ！！」
その間に凍った身体を引きずりながら起き上がった怪物に、ぐんっ、と飛び蹴りが伸びる。

その足には冷たい光が纏われており、それがまだ凍り付いていない部分の、怪物の身体に深々と沈めば、あっという間にそこから凍りついてゆく。
『ウギャアアアァ！？　馬鹿ナ、ジェリアラムノ、俺ガアァッ、人間ニ……』
少年はそのまま、ぐり、と恐らくは腹部の辺りを強く踏みつけて、地面に縫い付ける。
「残念だったな」
はっ、と侮蔑した様に少年はそれはそれは美しい声で、告げた。
「教えてやるよ、俺の中に流れる、この血に逆らう事をした、お前の運命を」

そのまま横にひらめかせた、黒い手袋に包まれた手のひらに透明な剣が現れる。
「後ろの子供が無傷とは言えども、人を襲うようになった。ならば当然、鎮魂歌（レクイエム）、だけれどな」
最後の反撃、というのだろうか、怪物の実体を持った指が少年の顔を狙うが、少年は顔を僅かに逸らして、その柄を無造作に掴み取り、その手を切り裂く。
『ギヒャアアアアアアァァァッ！？』
「大人しく、外道に帰れ、堕ちろ、本来の場所に」
真っ直ぐに透明な剣を、額にはまった宝石に向けて、突き立てた。
リィーン、と澄んだ音色を立てて、宝石は砕け散った。
「ふぅ……」

少年が息をつき、夕焼けに煌く真っ赤な瞳を、真っ直ぐにこちらに向けた途端、顔を覆う布の止め具が壊れたのか、柔らかく布が顔を滑り落ちる。

「え！？」

夕威の驚愕した視線の先に…手のひらに鋭い透明の輝きを持って、ふわっ、と風にたなびく漆黒の衣を纏った少年は、夕方あの屋敷の門前で出会った、屋敷の所有者。

気高い獅子のように鋭い瞳を煌かせた、和泉原奏音だった。

休題０１（前書き）

時間とネット環境が～！！

休題０１

和泉原　奏音　（以下：奏）
「作者が時間取れないそうだから俺らが代わりに何か話をしておけ、ということだ」

水城　夕威　（以下：夕）
「…と、唐突、だね……。本編、大して進むどころかまだ『起』にすらなってないのに」

奏「文化祭で出す冊子で死んで、通信環境が最悪すぎるんだと。だから、たまにはもう一個の『タイヒメ』じゃなくて、『シャドウ（影の屋敷）』を進めるか、という本末転倒さでこっちを更新したらしい」

夕「……あれ？　そういえば参加メンバーって僕らだけ？　ほかのメンバーは……」

奏「まったく出てないから俺らだけ、だそうだ」

夕「……本当に本末転倒だね」

奏「諦めろ。疲労で精神状態がおかしいんだ。というより、いつものことだろう」

夕「そ。で、何するの？」

奏「とりあえずまぁ、ネタがないしな……。文化祭で出す予定だった没小説のネタばらしでも。性格については深々とは掘り下げてい

ないそうだ」

夕「？馬鹿じゃないの！？　ていうか、ほんっとうに、ネタがないんだ……。で、主人公の名前は？」

奏「神篠　良（かみしの　りょう）。性格は俺から性格を取ったそうだ。まぁ俺の性格も兄弟が借りてきた仮面●イダー●ィケイドＤＶＤ主人公の士から、らしい。よくは知らんが」

夕「で、メインの残りは二人、だっけ？」

奏「そう。ちなみに兄妹で三栗　翼（めぐり　つばさ）と北斗（ほくと）」

夕「性格は？」

奏「翼の性格は、こっちも仮面●イダー●ィケイドＤＶＤから、ユウスケをちょっとモチーフにしたそうだ。良がつんけんしてるから、プラマイゼロなキャラが欲しかったんだと」

夕「それで北斗ちゃんは？　ある意味鍵となる女の子でしょ？」

奏「北斗は……ほんわかした女の子、と考えてたら何故か脳裏にＣＣ．●くらが出てきて、ちょっと似た感じになったらしい」

夕「……『鍵』つながりでそこにいったんだ？」

奏「らしい。自分のキャラ特徴にひねりがないもんだから、引っ張ってきたそうだ」

夕「そういえば俺のこの性格も、微妙に自分とそのキャラの性格を混ぜたんだっけ。あまり出てないけど」

奏「俺も多少なりとも自分で考えた性格を引っ張ってきたそうだ。ひねりがない癖、何をやっているんだか」

夕「……容赦ないね、奏音」

奏「毒舌なクール系とか、動かしやすいらしい。もしくは怒らせたら怖いほんわか系」

夕「で奏音は毒舌なクール系と。怖いほんわか系は、この作品に出すの？」

奏「さぁ？　基本はできているそうだが、あまり深く書き込んでいないからな。というか、ただの馬鹿にそれを求めるのはただの無謀ということだ」

夕「……本当に動かしやすいの？　月峰……」

奏「結構ずばずば言うキャラと、怒らせたら怖いキャラは動かしやすいから好みらしい。現に仮面●イダー●王の、野上祖父孫コンビがツボらしい」

夕「馬鹿だ。果てしなく馬鹿だ」

奏「あぁ。とにかくまぁ、話は埋まったからこれで終わりらしい」

夕「ぐだぐだ過ぎない？　まぁ、帰れるんならいいけど」

奏「そうだな。とりあえず……飽きずに待っていてくれる方がいてくれるなら、まぁ、これからもよろしく頼む」

夕「ばいばーい」

休題０１（後書き）

はい、というわけで奏音&夕威の座談会（いつ決めた）でした。

ほんっとうに時間が取れなくて、こういう投稿しかできません。

とりあえずまぁ、座談会で言っていた奏音の性格については、本当に仮面●イダー●ィケイドの門矢士から多少引っ張ってきました。

ああいう性格のキャラは、なんか動かしやすいんです

よね。

夕威については、結構自分で考えた性格が大きいのですが、多少、●イルズのジーニアスから引っ張ってきました。パソコンに対して、天才なところとか。

とりあえず、これからちゃんと投稿出来続けるかはわかりませんが……。これからもよろしくお願いします！！　　月峰

夕

体質と力（前書き）

……どれだけ時間あけたかなんて、考えたくないほどあけたなぁ…

……

体質と力

そこに立っていたのは、紛れもなく和泉原奏音だった。
……ただ、瞳の色がまったく違う。

鳶色。

先ほど見たときは、そういう瞳の色をしていたのに、今は。

こげ茶の髪に変わりはない。
けれど、鳶色の瞳は、底の見えない、鮮やかな真紅に染まっていた。
どこか血を連想させるような深さを持ちつつ、まるで紅玉のような煌きを持っていた。

何も言葉が出ず、ぽかんと夕威が奏音を見ていると、無造作に腰から何かを抜き出す。

それは夕日に煌いて鮮やかに反射する、ガラスのフルートだった。
きらきらと、本当に綺麗で、こちらにも見とれてしまう。

それをすい、と口元にあてがい、軽やかな、それでいて悲しげな旋律を奏で始めた。
まるでそれに誘われるかのように、ざあぁ……と、風が流れ、意識が遠ざかるような感覚を覚え始める。
ゆっくりと、眠気が襲ってくる。あまりにも強いそれに、こくん、と思わず頭が揺らぐ。

不意に奏音は演奏をやめる。

夕威の目の前にしゃがみ、額に手のひらを当てて、そっと口を開く。
———忘れてしまえ。日常に戻りたいのならば、さっきのことを。
———覚えていたって、日常を生きるお前には、かかわりがない。
軽やかな先ほどの旋律に乗せるかのような、静かに心のどこかに流れ込む声。
———わかったのなら、頷け。
———一回頷けば、それでいい。
———望むとおり、日常に返してやる。
緩やかにつむがれる言葉に、ぼんやりと、夕威は頷きかけて。
『だめよ、その声を聞いてはだめ！！』
女性の声にそう叫ばれて、はっ、と夕威は目を開ける。
目の前にいて、手のひらを当てていた奏音は、驚いた表情をして、目を瞬かせた。
「お前……」
「え？　あれ？　……あれ？　女の人は？　聞いちゃだめって叫んだ……」
本人は首をひねるだけだが、奏音は自覚あるのか、と呟く。
「あ、あの……さっきの、女の人は……」
「まったく面倒なやつだな、お前。……普通は一回目で既に、『声』を自覚してるほうがおかしいんだが、この際どうでもいいし、まぁいい」

夕威がおずおずと奏音に問いかけるが、一切その話を聞かず、舌打ちをして、そう呟いたあと。

「お前、神の加護を受け、洗脳や催眠術など、身体に悪影響を及ぼすものを一切受け付けない珍しい体質『キルケード』だな」

その言葉に、張本人こと夕威は首をひねるだけであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9486m/

影の屋敷

2011年5月16日15時44分発行